Japanse vereniging
voor de studie van

ベルギー研究会　会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

Vereinigung
für belgische Studien

第11号
2026年11月

Association japonaise
d'études belges

ベルギー研究会　会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

第11号
2026年11月



研究会の記録

2026 年度

第 107 回研究会

日時　2026 年 9 月 19 日（土）13:00–17:00
会場　滋賀県立大学　A7-101 教室（ハイブリッド開催）

【発表】 平岡洋子「ブリューゲルの 6 枚連作《12 か月図》の主題」
【発表】 井内千紗「1950 年代ベルギーにおける放送による音楽文化の形成――J. ボーン『高級文化を民主化するラジオ』を手がかりに――」
【発表】 佐藤孝彦「映画「ダホメ」批評――コンゴ（民）・ベルギー間における restitution の動きとの比較――」

ブリューゲルの 6 枚連作《12 か月図》の主題

平岡洋子

イギリスの小説家マイケル・フレインに、ミステリ小説『墜落のある風景』がある。十六世紀のフランドルの画家、ピーテル・ブリューゲルのある絵画をめぐる小説だ。英語のタイトルは Headlong で、その意味は「真っ逆さまに、向う見ずな、軽率な、無鉄砲な」である。『墜落のある風景』という日本語タイトルは、人が真っ逆さまに落ちる情景を思い浮かばせる。人が真っ逆さまに落ちる絵といえば、ブリューゲル作とされてきた《イカロスの墜落》（ブリュッセル、ベルギー王立美術館）だろう。しかしこの小説はその絵を扱ったものではない。ブリューゲル作の、今は紛失してしまった別の作品を扱ったものだ。

小説は、主人公マーティンがある別荘地のある家である日突然、失われていたブリューゲルの絵を発見することから始まる。日本語タイトルで「墜落」とした Headlong は、小説では、その絵に描きこまれたとても怖い光景をあらわす言葉で、この光景が、この絵がなぜ失われたかという謎を解く鍵になっている。

マーティンは出会った油彩画がブリューゲルの六枚連作『季節画』の失われた一枚だと確信する。しかし、確とした証拠が示せなければ人には言えないと思い、描かれた内容や失われた一枚の数奇な運命を辿ろうと図書館で調べ始める。

本研究会の発表者は、2012 年にニュルンベルクの国際学会で「主題『12 か月図』連作説」を発表したが、まだその説は広まってはいない。したがって、このレジュメでも“六枚連作『季節画』”と言わなければならない。本発表者の説をマイケル・フレインが知っていたら、マーティンが出会った油彩画が連作の失われた一枚かどうか、もっとはっきりとした形で確かめられただろうに。

この発表では、六枚連作画について、①作品の来歴：注文の経過と完成後の作品の行方。②『季節画』説に抗する理由。③六枚連作の各パネルの主題を述べたい。これまで、二回発表の機会があったがいずれも 15 分とか 20 分だったのでほとんど語るべきことを語っていない。今回は 60 分の発表時間を設定してくださっているので、話すことが可能で幸いだ。ベルギーの民俗的な風習についてベルギー専門の先生方のお考えを伺ってみたい。

1950 年代ベルギーにおける放送による音楽文化の形成――J. ボーン『高級文化を民主化するラジオ』を手がかりに――

井内千紗（拓殖大学）

本発表は、1950 年代ベルギーの公共放送がどのような音楽文化の形成を目指したのかを、ヤン・ボーン（Jan Boon, 1898–1960）の論説を軸に考察する。ボーンは、フラーンデレン民衆劇団の運営や日刊紙『デ・スタンダールト』の編集長という経歴を経て、1939 年からベルギー国営放送協会のオランダ語放送を率い、1945 年以降は協会全体の会長を務めた。彼が公共放送を主導したこの時期のベルギーは、文化政策の面では文化省の設置や言語問題の緊張による文化的自治に向けた協議、メディア環境の面では 1953 年のテレビ放送開始とともに、放送が言語共同体ごとに編成されていく大き

な変化の過渡期にあった。こうした時代背景をふまえ、発表では論説の分析をもとに、彼が放送を通じてどのような音楽文化を理想としていたのかを探る。

映画「ダホメ」批評――コンゴ（民）・ベルギー間における restitution の動きとの比較――

佐藤孝彦

（パナソニックエナジー株式会社）

2024 年制作のドキュメンタリー『ダホメ』（監督：Mati Diop）は、2021 年にパリの博物館からベナンへ返還された王室宝物 26 点を手がかりに「文化財は誰のものか」を問う。若者の視線を通して過去と現在が交錯する時間を詩的に描く。本発表は同作の表象と歴史認識を批評的に検討するとともに、コンゴ民主共和国―ベルギー間の restitution 動向を植民地・宗主国関係というポストコロニアルな文脈から比較考察し、道義的責任、法制度、資源主権、遺骨返還を含む restitution の「現在地」と今後の課題を検討する。

第 106 回研究会

日時　2026 年 6 月 20 日（土）13:00–17:00

会場　大阪公立大学文化交流センター小セミナー室（ハイブリッド開催）

【話題提供】白田由樹「世紀転換期ベルギー文化研究の展望と今後の課題――装飾芸術運動の共同研究を通じて」

【発表】安彦良紀「多言語ラップが再編するブリュッセルの都市空間：モレンベークの現実とマトンゲの記憶」

【発表】小菅葉月「ユゴーにおける〈進歩〉の変容――『ノートル＝ダム・ド・パリ』から『レ・ミゼラブル』へ」

【発表】正躰朝香「欧州移民ガバナンスとベルギーの移民政策（予備的構想）」

世紀転換期ベルギー文化研究の展望と今後の課題――装飾芸術運動の共同研究を通じて

白田由樹（大阪公立大学）

世紀転換期のヨーロッパ比較文化研究として実施してきたドイツ語・フランス語圏を中心とする装飾芸術の共同研究が、共著（2 巻構成の第 2 巻）の出版をもって一段落つく見込みである。ベルギーの担当として報告者は、この国のアール・ヌーヴォーの出現と変容、衰退の要因を探り、芸術と社会の改革を目指したつくり手や支援者たちのコミュニティが「世紀末ルネサンス」を生み出した一方、当初から彼らの間に方向性の違いや理念との矛盾が存在し、やがて見えざる分裂や離脱にいたる道筋を掘り起こしてきた。今回は、こうした研究の成果を概観的に報告するとともに、残されている課題を示しつつ、「世紀転換期ベルギー」を文学・芸術・社会・文化史の領域横断的研究として発展させる可能性について、参加者の方々と意見交換を行いたい。

多言語ラップが再編するブリュッセルの都市空間：モレンベークの現実とマトンゲの記憶

安彦良紀（大阪公立大学）

本発表の目的は、ベルギー・ブリュッセル首都圏地域のラップミュージックにおけるコードスイッチングが、いかに従来の言語境界を超越した越境的文化アイデンティティを構築しているかを解明することである。

連邦制を採用するベルギーは、フランス語、オランダ語、ドイツ語の境界線で制度的に分断されており、フランス語とオランダ語の二言語併用地域であるブリュッセルでは公的な共存が図られてきた。しかし、この枠組みは現代の多様な言語実態を捉えきれていない。近年の知見では、メディア空間での公用語間のスイッチングは稀で英語への切り替えが主流である一方、一般市民の間では公用語、英語、移民言語が高度に混ざり合う「重層的コードスイッチング」が活発化している。

本発表では、この事象を単なる言語間の往来ではなく、切り替えのプロセス自体が自律した表現体系を構

成するという視点から再考する。ラッパーたちは各言語のニュアンスや背景を戦略的に選択・横断しており、その衝突と融合のダイナミズムを通じて、独自の統合的な表現コードとしてブリュッセルの多層的な言語状況を体現しているのである。

ユゴーにおける〈進歩〉の変容――『ノートル＝ダム・ド・パリ』から『レ・ミゼラブル』へ

小菅葉月

本発表は、ヴィクトル・ユゴー初期の長篇小説『ノートル＝ダム・ド・パリ』と、亡命期を経た『レ・ミゼラブル』における〈進歩〉の違いを考察する。ユゴーの〈進歩〉は単純な楽観ではなく、停滞や後退、逆説を含みながら、それでもなお未来へ向かう運動として論じられてきた。『ノートル＝ダム・ド・パリ』では、印刷術の登場を、歴史を背負う大聖堂と対比することで、文明の進展を描いており、そこでは〈進歩〉が、大聖堂を中心にした中世の秩序が揺らぐ力として現れている。一方、『レ・ミゼラブル』では、貧困や法に縛られた人間が、〈無限〉への信念に触れたミリエル司教との出会いを経て、自らの苦しみを引き受け、他者へはたらきかけながら、前進する姿が描かれる。以上を踏まえ、二作品における〈進歩〉の表れ方を比較し、それが歴史の変化を示す力として、また人間が未来へ向かう力として、どのように描き分けられているのかを明らかにしたい。

欧州移民ガバナンスとベルギーの移民政策 （予備的構想）

正躰朝香（京都産業大学）

EU を中心とする欧州の移民ガバナンスについて、特に社会統合レジームにおける移民の文化的多様性の尊重規範について報告し、今後展開しようとするベルギーの移民政策との関係の分析に繋げる研究構想を発表したい。

報告者は、欧州移民ガバナンスを出入国管理レジームと社会統合レジームの 2 つに分け、それぞれをグローバル／リージョナル（欧州）／ナショナルの 3 つのレベルに整理し、3 つのレベル間と 2 つのレジーム間の相互作用として捉えて、近年の移民ガバナンスの機能不全を分析しようと試みてきた。欧州レベル、ナショナルレベルについて、より実証的な分析を通してレベル間の相互作用を考察が必要である。「欧州レベルの移民の文化的多様性尊重規範の影響下で、各国は自国言語の習得・市民化（文化、価値の受容）をどの程度まで移民に課して、受入れ国国民との対立や排外感情を抑え、秩序ある社会統合を図ろうとしているか」について、ベルギーを事例として分析を深めたい。

2025 年度

第 105 回研究会（ブリュッセル大会）

日時　2026 年 3 月 5 日（木）13:00–17:30

会場　ブリュッセル自由大学（ULB）Campus Solbosch, DC2 206

【発表】 利根川由奈「ベルギーのシュルレアリスムにおけるプリミティヴィスム――ジェーン・グラヴロール作品を中心に――」

【発表】 北村真弥「現代における日本からフランコフォニーへの渡航と長期滞在」

【発表】 澁谷恵美「ガストロノミーを通じた欧州向けアウトバウンド観光の促進に関する一考」

【発表】 シュライデン・ヤヌー「EXPO 2025 大阪・関西万博――アテンダントとしてベルギーパビリオンの内幕 World Expo 2025 Osaka - the backstages of the Belgian Pavilion as an attendant」

ベルギーのシュルレアリスムにおけるプリミティヴィスム――ジェーン・グラヴロール作品を中心に――

利根川由奈（文教大学）

本研究は、1950 年代ベルギーでシュルレアリスムに参加した女性作家、ジェーン・グラヴロール（1905-1984）の作品に見られるコンゴを想起させる表象と、シュル

レアリスムのプリミティヴィスム受容との関係を明らかにすることを目的とする。

グラヴロールは、1957 年 3 月から 3 か月間、ベルギー植民地省が主導したベルギーとベルギー領コンゴの芸術家交換留学制度を使って、コンゴの首都・レオポルドタウン（現コンゴ民主共和国・キンシャサ）に滞在していた。彼女はこの滞在を機に《未知なるアフリカ》（1958 年）など多くの作品を制作した。《未知なるアフリカ》に見られる、黒人女性、人魚、雲、ビル、という一見何の脈絡もないモチーフの組み合わせる手法は、シュルレアリスムのデペイズマン（事物を元の文脈から切り離し、別の文脈に置き換える手法）であり、鑑賞者に驚きや不思議さを感じさせる。そのため本研究では、コンゴを想起させる表象とデペイズマンを組み合わせたグラヴロール作品の解釈可能性を、シュルレアリスムのプリミティヴィスム受容の文脈から明らかにすることを目指す。

現代における日本からフランコフォニーへの渡航と長期滞在

北村真弥（神戸大学）

本発表は、日本からフランコフォニーへの渡航および長期滞在を対象に、その構成国であるベルギーに着目し、インタビュー調査を通して、渡航経験の意味づけとそれが個人のライフコースに及ぼす影響を検討する。

現代における技術革新とグローバル化の進展は、移動の物理的・身体的制約を緩和し、国境を越える移動の多様化を促進すると同時に、新たな不平等や格差も生み出してきた。とりわけ中間層に位置する比較的裕福な人々による、「より良い生活」を志向するライフスタイル移住の広がりが指摘されている。しかし、日本の移民研究は主として受入れ側の文脈に偏っており、送り出し側研究においても英語圏への移動や経済移民期との歴史的連続性に焦点を当てたものが多い。そこで本発表では、人生の語りにおけるベルギー渡航経験を、フランコフォニーという視点を交えつつ、ライフスタイル移住概念を参照しながら、個人の経験と社会構造を結びつける形で読み解く。

ガストロノミーを通じた欧州向けアウトバウンド観光の促進に関する一考

澁谷恵美（追手門学院大学）

これまでの発表では日本におけるインバウンドの回復に焦点をあて、欧州各地のオーバーツーリズム対策や近年の観光の傾向などを観光ガイドの役割や貢献の視点から報告をしてきた。一方、観光庁（2025）は「アウトバウンド（日本人の海外旅行）の促進」は、若者や国民にとり、「国際感覚の向上」や「国際相互理解の増進」に深くかかわり、「インバウンドの更なる拡大」との関連も言及をしている。

今回の発表では、アウトバウンド観光の促進に着目し、国内外の観光の動向についての報告の他、「内向きの傾向」があるのではないかといった教育現場の実感を通じ、「外向きの思考力」の育成や、昨今注目される食や食文化を通した観光の視点から文献を参照し、「都市型の持続可能性」を学ぶ場について欧州での研修事業実施の促進を検討する。目的地及び観光地の再認識として、ガストロノミーを包括し、その魅力や学びを考える場として欧州をターゲットに議論を展開する。

EXPO 2025 大阪・関西万博――アテンダントとしてベルギーパビリオンの内幕

World Expo 2025 Osaka――the backstages of the Belgian Pavilion as an attendant

シュライデン・ヤヌー（リエージュ大学）
SCHREIDEN Yannou（Université de Liège）

It has been almost a year since the 2025 World Expo at Osaka opened its doors. Visitors coming from all over the world came to attend this world-class outstanding event. Over the six-month period of the exhibition, consisting of 184 opening days, almost 30 million people visited the venue located on the island of Yumeshima. Almost one million of them gave us the pleasure of discovering the Belgian Pavilion. For most of them, visiting the Expo was a one-time experience. However, I would like to pinpoint some very dedicated and enthusiastic visitors: the Banpaku Lovers. Some of them came to the Expo more than twenty times. Nevertheless, none of them went beyond what we called the “Visitor Journey”.

Therefore, as a former attendant of the Belgian Pavilion, it appeared to me that sharing my work experience could shed some light on the “behind the scenes” logistics of such an event. It has undoubtedly been different for every country but, for this 105th reunion of the Japanese Association for Belgian Studies, I am delighted to explore the special case of the Belgian Pavilion.

All the information gathered for this presentation is either

part of my personal testimony or can be found on the official websites and SNS of the Belgian Commission General for International Exhibitions (BelExpo), WBI (Wallonie-Bruxelles International), Wallonia.be and the Belgian Buildings Agency. However, as a former attendant, I will focus on the reality of my colleagues and on the on-field issues I had to deal with.

In summary, we will raise the questions of the composition of the working team, the recruitment process of the attendants, the role and the work of the attendants, the architecture and the content of the Visitor Journey of the Pavilion, the events and the thematic weeks, and finally, the aftermath of the Exposition.

As this presentation is mostly about sharing memories, please feel free to ask any questions you might have. The purpose is to experience a moment of exchange, just like the ones I had with the many visitors of the Expo.



偶然や脱線がいつしか必然に結びつく
私が「幕末明治期の開港場横浜における外国人社会とベルギー人」というテーマにたどりつくまで

後藤 加奈子

時間的制約と経済的必要に迫られた、母語が異なる人たちは、意思疎通を図るためにどのようなコミュニケーション手段を使うだろうか。ジェスチャー？ピクトグラム？2026 年を生きる我々は、そんな時は携帯電話の画面を見せあいながらなんとか会話をしようとするだろう。隣のテーブルの人が食べているものを指さして「同じものをください」と意思表示するという方法も、原始的だが未だ効果的だ。では、インターネットも携帯電話もなかった時代の人々はどのようにしていたのだろうか？特に、言語的にも文化的にもほとんど共通項がないように見える西欧と日本の人々が初めて出会い、しかも両者が対立するわけでも、支配したりされたりするわけでもなく、あくまでも共存を試みる場合には、どのような言葉が使われたのだろう？これらの問いに引っ張られるようにして、筆者は開港直後の横浜における言語接触について 2022 年頃より調査を始めた。1853 年から 1899 年までのおよそ 40 年間－浦賀沖への黒船来航から、欧米諸国と日本が締結した条約が改正されるまでの期間－に商業上の必要から生まれ、来訪外国人が増えるにつれて発展し、やがて緩やかに消えていった接触言語は、「横浜ピジン」あるいは Yokohama Dialect の名で知られている。横浜ピジンは正式な書き言葉ではないため、当時の公式文書には登場しないが、旅行記や滞在記、絵、風刺画、写真、新聞記事などにその断片が残っている。筆者は、デジタル化された当時の資料に時折助けられながらも、主に手作業でこれらの資料を一つ一つ確認している。根気の要る作業だ。

19 世紀末の横浜の外国人社会（以下、外国人居留地と記す）について調べるとき、教科書的存在ともいえる文献はいくつかあり、アーネスト・サトウやバジル・ホール・チェンバレンの著作などがそれにあたる（どちらも英国人であることに注目。当時の日本で圧倒的な影響力を持つ西欧の国と言えば、それはやはり英国なのである）。お役人が残した公的な記録ではなく、当時の人にしかわからないようなプライベート・ジョークをふんだんに含む風刺雑誌に目を向けるとするなら、「教科書」はふたつある。一つ目の教科書はイギリス出身の画家チャールズ・ワーグマン（1837-1891）が延べ 25 年にわたり横浜で発行し続けた風刺雑誌 The Japan Punch「ジャパン・パンチ」（以下「パンチ」と記す）。二つ目は、フランス出身の画家ジョルジュ・ビゴー（1860-1927）の手による Tôbaé「トバエ」や Potins de Yoko「ポタン・ドゥ・ヨコ」、 Potins「ポタン」、 La vie japonaise「日本の生活」などの作品群である。「パンチ」は、雑誌という出版形態を日本に広めただけでなく、現在も使われる「ポンチ絵」という言葉のもとにもなった作品。ビゴーの風刺画は、歴史の教科書によく登場するので（「魚釣り遊び」（1887）「社交界に出入りする紳士淑女」（猿まね）（1887））、作者の名前は知らなくても絵のことは覚えている人も多いのではないだろうか。これらの作品には、横浜居留地内でのみ発行されることが可能だったという共通の特徴がある。つまり、風刺画に描かれる人物や風景が日本政府の検閲に触れる危険があっても、ワーグマンとビゴーは居留地内であれば領事裁判権を行使して自由に芸術、商業活動ができたのである。

言語接触、幕末の横浜、居留地、言論の自由、領事裁判権…これらのキーワードに囲まれて調査を続けていると、「パンチ」のページの中に、「これはベルギーのことを揶揄しているのでは？」と思われる絵が複数あることに気づいた。筆者が今まで解読できた限りでは、いわゆる「ベルギー・ジョーク」は日白修好通商航海条約締結の翌年の 1867 年に初めて現れ、その後も数十回にわたり登場するが、特に 1880 年から 84 年にかけては執拗と言っていいほど



写真 1. ワーグマン「ジャパン・パンチ」(1867 年) ギメ東洋美術館図書館蔵 (BG 4170)

の頻度で姿を現すことがわかった。最初に筆者の目に留まったのは、1867 年（10 月号と推定）に登場する絵（写真 1）で、ベルギー建国のモットーともいえる言葉「団結は力なり」L'union fait la force を掲げた、蔵のような小さな建物の周囲に様々な「ベルギー商品」と、二人の柄の悪そうな人物が描かれている。この画像では少々見づらいが、キャプションには「ベルギー出身者を待っているベルギー領事」The Belgian consul waiting for subjects とある。当時、日本にはベルギー人が数えるほどしかいなかったことを皮肉っているのである。年代から推察して、ここで言及されている領事とはルイ・ストラウス Louis Strauss （1868 年より在東京ベルギー領事）のことだと思われる。

ワーグマンの関心は、ベルギー（というよりはブリュッセル）特有のフランス語表現 Savez-vous ?（「そうですよね？」）にも向けられ、それは 1870 年から 84 年にかけて合計 5 回の風刺画の題材となっている。いわゆる「ベルギー特産品」については、17 世紀から現在まで発行され続けている予言集「リエージュ暦」Almanach de Liège の名を冠する旗がはためき、ブリュッセルのランビック・ビール やリエージュの地酒ペケの名前が（音声表記で）樽の上に書いてある絵（写真 1）、自国の製品を精力的に日本市場に売り込む「ベルギーの商業担当」 Chargé d'affaires de la Belgique を揶揄した絵などがある（1881、82）。

1883 年 1 月号には、この「商業担当」と同一人物と思われる男性の肖像画が掲載される。キャプションによれば、この人物は「全てのベルギー人のための総領事」Consul general for all the Belgians であるらしい。この風刺画の情報と当時の外務省の記録やディレクトリー（在日外国人・機関名鑑）、ベルギーの新聞記事などを照会した結果、この人物は 1880 年から 84 年まで在横浜ベルギー領事（82 年からは総領事）を務めたエフ・ジー・スクリーブ François Gustave Scribe （1846-1884）であることがわかった。また、ワーグマンは 1884 年 1 月号と 2 月号でこの人物の「火山のような気性」Consul général volcanique について言及しているが、その真相のほどは「パンチ」を読むだけではわからず、外交文書や横浜居留地の様子を記した資料にあたる必要が出てくる。ところで、日白両国の外交面での交流について基本的な情報を記したさまざまな資料には、歴代の駐日ベルギー大使、公使、領事のリストが含まれることが多いが、在横浜ベルギー領事のリストの 1880 年から 84 年の部分は空白となっている。しかもワーグマンの残した風刺画には対象となる人物の名が記されていない。謎は深まるばかりである。

少し脱線してしまったので話を元に戻そう。「パンチ」に出てくるベルギー関係の一連の絵には、開港後横浜に移り住む外国人たちが形成する閉鎖的な社会の中で、ベルギーはあくまで日本に「あとからやって来た小さな国」であり、居留民の数はきわめて少なく、その商品は独特である、といった、「大国」である大英帝国出身のワーグマンのいわゆる上から目線の目くばせが感じられる。とはいえ、これらの絵の中でベルギーが風刺されていることに筆者が気づいたのは、ワーグマンが仏語・蘭語・英語でキャプションをつけてくれているおかげでもあるので、大国出身者らしからぬワーグマンのコスモポリタン精神には感謝しなければならない。そのほかにも、ベルギー王室の紋章のライオンがダンスをしていたり（1870）、盾に彫られた同じライオンが明らかに邪悪な形相をしていたり（1881、1884）、ベルギー王国の標語「団結は力なり」の仏語原文 l'union fait la force が l'oignon fait la force 「タマネギは力なり」になっていたり （1883 年 12 月、1884 年 1 月、2 月）と、芸が細かい。筆者は 2022 年より、主に日本の図書館で「パンチ」の復刻版を 1 ページずつチェックする作業を続けているが、静かな図書館の閲覧室で何度声を殺して笑ったことだろうか！

このようにして、幕末明治期の横浜の言語接触に関する記述を探す目的で「パンチ」のページをめくりつつ、たびたび現れるベルギー・ジョークと思われる絵に関してはその都度メモを取りながら別のノートにまとめていったところ、調査開始から 4 年が経った 2026 年秋現在、解読できたものだけを数えても 60 ほどの絵がベルギーに何らかの形で言及していることがわかった。「パンチ」は不定期刊行でありつつも、1 号あたり約 10 ページ、ほぼ月刊のペースを保っているので、現在判明している限りでその全ページ数を概算すると 2500－3000 ページほどになる。その中の 60 ページ強というと、「パンチ」を構成する全ページの 2 パーセント強にあたる。「あとからやって来た小さな国」を扱うにしては、これは特殊な計らいだと言えはしないか。言い換えるなら、ワーグマンはベルギーに個人的になんらかの思い入れや親しみ、あるいは気になることがあるのではないか。これらの問いには未だ答えは見つからないが、既にチェックした絵を数か月、数年の間隔を置いて二度、三度と見返すと、以前は気づかなかった細部にハッとさせられることが多い。また、当時ワーグマンと同じ番地にスタジオを構えていた写真家フェリーチェ・ベアト（1863 年来日）の日本の風景や人物の写真を見たり、ワーグマンと仲が良く、1867 年に一緒に東海道を旅したとされるサトウの文章を読んだりすることにより、風刺画とそのキャプションという二次元の情報が突如、立体的に見えてくるから不思議である。また、研究対象から 150 年以上の月日が流れた今、実際に横浜の港の周辺を歩いたり、ワーグマンが眠る山手の外国人墓地を蚊の大群に襲われながら途方に暮れてさまよっているうちに、正午を知らせる汽笛の音がすぐ下の港から聞こえてくるようなとき、どこへたどり着くのか自分にも分からない、地道で目立たない研究作業が二次元から三次元へと転じ、偶然や脱線から必然へと導かれているように感じることがある。別テーマのコーパスとして閲覧していた「パンチ」の中に頻繁に登場する「ベルギー・ジョーク」との予期せぬ出会いが、筆者に開港当時の日本とベルギーというテーマを公式記録からではなく、その舞台裏から観察するきっかけを与えてくれたと、今では胸を張って言える。

筆者は、ベルギー研究会において「幕末明治期の開港場横浜における外国人社会とベルギー人」というテーマで 2024 年 3 月から 3 度にわたり調査の途中経過を発表させていただいた。発表後に会場から寄せられた的確な質問や指摘は、本研究を突き進める原動力になっていると言っても過言ではなく、このささやかな「謎解き」を筆者と一緒に面白がってくれる仲間がいることを幸運に思う。



会員の刊行物

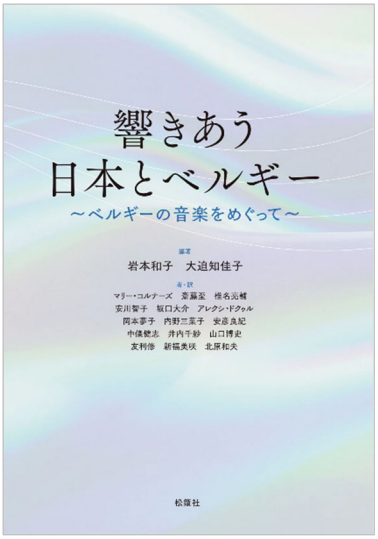


ベルギーを知るための 64 章【第 2 版】

小川秀樹 編
明石書店、2026 年 10 月刊
定価　2,640 円（税込）
ISBN　978-4750360522

現行の国家だけ見てベルギーを理解することは難しい。本書は近現代ベルギーの社会や文化について解説を加えるとともに、歴史的に世界各地で活躍した「ベルギー人」に注目し、新たな視点を提供する。「ベルギーを知る」ことから「欧米」の成り立ちにまでつながる大胆な一書。

＊＊＊＊＊



響きあう日本とベルギー　ベルギーの音楽をめぐって

岩本和子・大迫知佳子 編
明石書店、2026 年 10 月刊
定価　3,000 円＋税
ISBN　978-4879844842

周辺諸国の影響を受け、複雑な言語事情や多層的な文化をもつベルギー。この国において、音楽は産業、政治、文学、美術など幅広い分野に影響を与える、重要な一要素であり続けてきた。ベルギーと音楽との関係を歴史的に辿りながら、西洋クラシック音楽から移民の音楽、そしてポピュラー音楽にいたる各ジャンルの音楽を様々な視点から考察する。「付録」として、ベルギーの音楽に貢献した F.-J.フェティス作曲のオペラ《双子姉妹》の台本・台詞の全訳を掲載した。

＊＊＊＊＊



フランス語圏を知るための 61 章

岩﨑えり奈・小島真智子 編
明石書店、2026 年 3 月刊
定価　2,640 円 (税込)
ISBN　978-4750360980

フランス語話者は 2050 年には現在の倍以上の 7 億人を超えると予測されている。本書ではフランス語を公用語もしくは行政言語とし、または一定程度の話者を擁する国々を「フランス語圏」と定義。複雑で多様なフランス語圏の政治・経済・社会・文化を、特にグローバル化との対比において活写する。

【論文】

小川秀樹　研究ノート：「イギリスに対してフランドル移民が与えた政治・社会的影響の歴史的一考察」『成蹊法学』第 103 号（2026 年 1 月）

小川秀樹　研究ノート：「イギリスに対してフランドルが与えた文化的影響の一断面――誰がイギリスの文芸を担ったの pp か」『成蹊法学』第 104 号（2026 年 7 月）

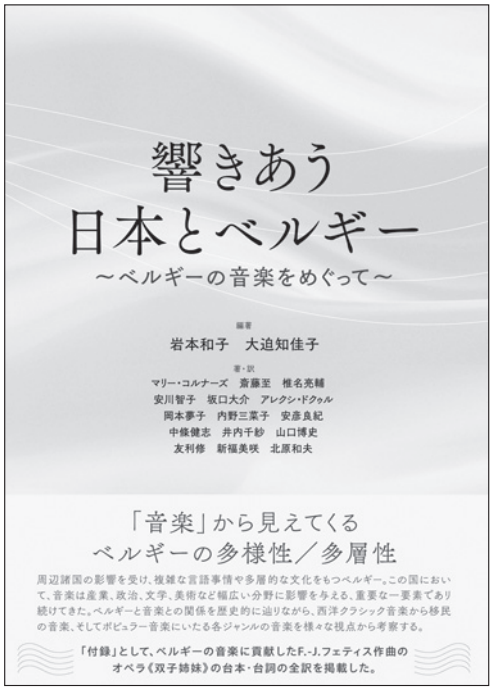


第４回『ベルギー学』シンポジウムの成果をもとにした論文集です

響きあう 日本とベルギー

ベルギーの音楽をめぐって

【編著】岩本和子・大迫知佳子
【著・訳】マリー・コルナーズ、斎藤至、椎名亮輔、
安川智子、坂口大介、アレクシ・ドクゥル、
岡本夢子、内野三菜子、安彦良紀、中條健志、
井内千紗、山口博史、友利修、新福美咲、北原和夫



- 3,000 円＋税
- A５判・ソフトカバー・392 頁
- 2026 年 10 月 31 日刊行

「音楽」から見えてくるベルギーの多様性／多層性

周辺諸国の影響を受け、複雑な言語事情や多層的な文化をもつベルギー。
この国において、音楽は産業、政治、文学、美術など幅広い分野に影響を与える、
重要な一要素であり続けてきた。
ベルギーと音楽との関係を歴史的に辿りながら、西洋クラシック音楽から移民の音楽、
そしてポピュラー音楽にいたる各ジャンルの音楽を様々な視点から考察する。
「付録」として、F.-J. フェティス作曲のオペラ《双子姉妹》の台本・台詞の全訳を掲載した。

【本書の主要目次】

第Ⅰ部　ベルギーの音楽の歴史
第 1 章　ベルギー〈建国神話〉と王立モネ劇場（岩本和子）／第 2 章　世紀転換期の民俗音楽を巡る議論にみるヴラーンデレン、ワロン、そしてベルギーの音楽（大迫知佳子）／第 3 章　ウジェーヌ・イザイ再発見（マリー・コルナーズ／斎藤至 訳）／第 4 章　ダンディ派とベルギー（椎名亮輔）／第 5 章　モーリス・クッフェラートと 20 世紀初頭のオペラ事情（安川智子）
第Ⅱ部　ベルギーの音楽の現在
第 6 章　ユーロ硬貨の音（アレクシ・ドクゥル／岡本夢子 訳）／第 7 章　フラーンデレンのサウンドスケープ過去・現在・未来～カリヨンと共に～（内野三菜子）／第 8 章　ベルギーのラップミュージックシーン（安彦良紀）／第 9 章　「移民」と音楽（中條健志）／第 10 章　放送オーケストラにみる 20 世紀前半のベルギーにおける音楽文化振興（井内千紗）
第Ⅲ部　《双子姉妹》上演記録
第 11 章　F.-J. フェティス　オペラ＝コミック《双子姉妹》 翻訳と注解（友利修）
【コラム】
旅するサクソフォン（坂口大介）／《双子姉妹》日本上演にあたって（新福美咲）／ベルギー留学と音楽（北原和夫）
【付録】
F.-J. フェティスのオペラ・コミック《双子姉妹》台本 全訳（友利修 訳）

★全国書店、オンライン書店でご注文いただけます。
★弊社直販サイト「松籟社stores」にてもご購入いただけます。QR コードはこちら→

〒612-0801　京都市伏見区深草正覚町 1-34
TEL：075-531-2878　FAX：075-532-2309
松籟社
ウェブサイト　https://www.shoraisha.com/
直販サイト　https://shoraisha.stores.jp/

ベルギー研究会への入会について

ベルギー研究会に入会をご希望の方は、以下の URL から入会申し込みをお願いいたします。フォームを受信し入力内容を確認次第、担当者よりメールでご連絡いたします。

https://forms.gle/ow5W6aCBsn1HVbzQA

問い合わせ先　井内千紗（chisa.inouchi@gmail.com）

ベルギー研究会会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

第 11 号

発行　2026 年 11 月

編集　石部尚登

事務局　神戸大学大学院国際文化学研究科中條研究室

サイト　http://www40.atwiki.jp/kbek/

ベルギー研究会

Japanse vereniging voor de studie van België
Association japonaise d'études belges
Japanische Vereinigung für Belgische Studien

Japanse vereniging
voor de studie van Belg

Japanische
für Belgische

Association
aponaise d'études belges

Associ